OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	プロラクチン分泌性下垂体腺腫（Prolactinoma）の臨床的検討
Author(s)	森，信太郎
Citation	大阪大学，1981，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33084
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【15】

氏名・(本籍)	森（もり）　信太郎（しんたろう）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第5368号
学位授与の日付	昭和56年6月12日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**プロラクチン分泌性下垂体腺腫（Prolactinoma）の臨床的検討**
論文審査委員	(主査) 教授 最上平太郎 (副査) 教授 倉智 敬一　教授 松本 圭史

論文内容の要旨

〔目　的〕

脳下垂体外科の臨床において最も高頻度にみられるプロラクチン分泌性下垂体腺腫（Prolactinoma）の臨床的，内分泌学的特徴を明らかにする。

〔方法ならびに成績〕

広島大学脳神経外科において，過去5年間に手術を受けprolactinomaと診断された48例の下垂体腺腫患者を対象とした。これらの症例を手術所見およびX線検査所見からみて

a）small adenoma　25例

b）expansive adenoma　12例

c）invasive adenoma　11例に分類した。

これら48症例について臨床症状と経過，血中プロラクチン（PRL）濃度，下垂体前葉ホルモン分泌予備能，X線検査所見，手術成績および病理組織学的所見を分析した。

対照として成長ホルモン（GH）分泌腺腫30例，非分泌性腺腫37例を検討した。

これらの検討において見出された結果は以下のごとくである。

1．48例のprolactinoma患者中34例は無月経，不妊を主訴とし，婦人科医より紹介された女性で，大半がsmall adenomaであった。

これを除いた14例は男女同数で，expansive adenomaが大多数を占めるGH分泌腺腫，非分泌性腺腫と同様に男女差はなかった。

年令分布は20～40歳がpeakを占めるが，出産適令期の女性にのみみられた。small adenoma 群

を除外しても同じように分布していたことから，prolactinomaは若年者に好発すると考えられる。

2．臨床症状としては全例に無月経あるいは陰萎がみられ，乳汁漏出は女性例の95％に認められた。視交叉症候群は14例にみられ，海綿静脈洞症候群は invasive adenoma 11例中4例にみられたにすぎない。

3．microadenomaの診断に重要なX線検査は多軌道断層撮影とhigh resolution CTである。頭蓋単純撮影で正常と判定した17例中12例に多軌道断層撮影によりトルコ鞍の限局的菲薄化が確認された。CTではmicroadenomaの存在はトルコ鞍内の不規則なX線吸収度の分布により示された。prolactinomaの鞍外伸展は22.9％にみられ，GH分泌腺腫および非分泌性腺腫の5～7％に較べて明らかに高頻度であった。

4．血中PRL濃度は74～15,000ng/mlにほぼ均等に分布し，腫瘍の大きさと血中PRL濃度の間には極めて高い相関性がみられた。無月経発症より受診までの期間と血中ＰＲＬ濃度を比較して腫瘍の発育速度を検討したが，腫瘍の発育速度は多様であると考えられる所見を得た。

5．下垂体ホルモン分泌予備能低下の頻度は，small adenomaでは明らかに低く，expansive adenoma および invasive adenomaでは高かったが，両者の間には差はなく，非分泌性腺腫のそれと類似していた。

6．手術成績は，当然のことではあるが，small adenomaにおいては良好でinvasive adenoma においては不良である。6例のinvasive adenomaにbromocriptineを使用し全例に明らかな腫瘤の縮小がみられたが，投与中止により血中PRL濃度はreboundを示した。

7．HE染色によって嫌色素性腺腫と診断されても，腫瘍のホルモン分泌性を否定し得るものではなく，電顕による観察および免疫組織学的検索が必須である。

〔総　括〕

48例のprolactinoma患者の臨床的，内分泌学的検討を行った。

1．prolactinomaは若年者に好発し男女差はない。また腫瘍の発育速度は多様である。

2．腫瘍細胞のPRL分泌能力はほぼ一定していると思われる。血中PRL濃度の測定により腫瘍の大きさを予測し得ること，血中PRL濃度と腫瘍の大きさを検討することにより PRL inhibiting factor障害型高PRL血症を呈する非分泌性腺腫を鑑別し得ることが明らかとなった。

3．prolactinomaは鞍外伸展を起す頻度が高く，他の分泌性下垂体腺腫に較べて手術成績が不良なことから浸潤性の性格を有していると考えられる。

4．下垂体前葉機能の障害は腫瘍の残存下垂体に対する圧迫が主因で，small adenomaの時期に始まり，expansive adenomaの時期にその極に達し，その後さらに鞍外に発育してもその程度は変らないと考えられる。

5．治療法はsmall adenomaに対しては手術を優先し，invasive adenomaに対してはまず bromocriptine療法を行い腫瘍の縮小を待った上で手術により摘出するのがよいと思われる。

6．prolactinomaの組織学的診断には電顕による観察と免疫組織学的検索が必須である。

論文の審査結果の要旨

近年の下垂体研究の進歩によりprolactin分泌性下垂体腺腫が下垂体腫瘍のうちで最も高頻度にみられる腫瘍であることが明らかになった。しかしこの腫瘍が他の腺腫と較べてどのような特徴を有しているかは明らかではない。本論文において，prolactinomaが若年者に発生し，不妊をもたらし，さらに浸潤性に発育する頻度が高いことが明らかになった。これらの事実は，prolactinoma患者を早期に発見し，根治的な治療を行うことの必要性を示し，その臨床的意義は大きい。

また血中prolactin濃度と腫瘍の大きさとの間にみられる高い相関性，早期診断に成長ホルモン分泌予備能の測定が重要であることおよび現在有効なprolactinoma治療薬とされているbromocriptineの治療効果が可逆的なものであることなど，本論文において見出された事実は今後の下垂体腫瘍の診療に重要な指針を示したと言える。